

時たま私の愛するものに對して

時たま私の愛するものに對して、私は憤りに満たされる、私は報はれない愛を浪費してゐるのではないかと思ふから、

然し今私は思ふ、世に報はれない愛はない——かうかあゝか兎に角返報はたしかだ。

(私は一人の人を心から愛した、而して私の愛は報はれなかつた、

然しそれあるがために、私はこれらの詩をば書き得たのだ)。

私に似た大地

私に似た大地、

お前はいかにも無感情に、飽き足りて圓味を持つて見えるが、

今私はそれがお前の凡てだとは思はない、

私は今推測する、お前には何か激烈なものがあつて、何時爆發するかも分らない。

何故なら一人の勇者が私に牽きつけられ——而して私が彼れに牽きつけられたから。

然し彼れに對して、私の心には何か激烈な恐ろしいものがあつて、いつ爆發するかも

わからない、

私はそれを言葉で表現するのを敢てし得ない——この詩の中にも敢てし得ない。

## 博名を知り得た時

四二二

英雄が高名を博したのを知り、偉大なる將軍の戦勝を知り得た時、私はその將軍を羨む心はなかつた。

大統領がその椅子にあるのも、富豪がその大厦にあるのも、私は羨む心がなかつた。

然し愛する人達の友情について聞いた時、その友情がどんなものであつたか、

生涯の間、艱難と誹謗との中に、長く／＼變ることなく、

青年期にも、中年期にも、老年期にも、如何に彼等が貞節であり、愛情に満ち忠實で

あつたかを聞いた時、

その時私は考へこんでしまふ——私は苦々しい羨望の念に満たされて、急いでそこを立去つてゆく。

## 私達二人の若者は互ひに相寄りながら

私達二人の若者は互ひに相寄りながら、

一人は他を決して見捨てることなく、

大道の上を遍ねく逍遙し——南と北とに散策を擅まゝにし、

力を樂しみ、——肘を延ばし——指を噛み合せ、

不敵に武装し——食ひ、飲み、眠り、愛し、

私達自身の律ての外の律てを顧みず——航海しつゝ、戦闘しつゝ、掠奪しつゝ、強迫しつゝ、

守銭奴と、卑僕と、僧侶とを脅かし——大氣を呼吸し、淨水を飲み、草原の上、海岸のほとりに舞踏し、

四二三

町々を侵略し、安佚を輕蔑し、法令を愚弄し、弱さを追ひ退け、私達の入寇を完ふするのだ。

私は愛欲にもだえるその人だ

私は愛欲にもだえるその人だ、

大地は相率かぬか、あらゆるものはもだえつゝ、あらゆるものと相率かぬか、それだから私の肉體も、凡ての逢ひ得たもの、凡ての知り得たものと。

## 女の歌手に

四一六

さあこの贈物をお受け、

私はこれを或る英雄、或る雄辯家、或る司令官のために蓄へてゐた、

古來の大義のために、民衆の進歩と自由とのために、私の魂の事業のために働いてくれる人にと蓄へてゐた、

然し今私は自分の蓄へてゐたものが、誰れにも劣ることなくあなたに属するものだ。私は知つたのだ。

## 一人の弟子に

改造が要望せられるか、而してそれがあなたによつてなされるのか、

改造が宏大なものであればあるほど、それを成就するためのあなたの個性も宏大でなければならぬ。

あなたよ、兩眼、血液、清らかに香ばしい皮膚がどれほど役に立つかを考へないか、

あなたが群衆の中に歩み入るとき、欲求と支配との空氣があなたと共にしみ入り、誰れもがあなたの個性によつて印象を受ける、そのやうな肉體と魂を持つといふことが、どれ程役に立つかを考へないか。

おい、磁力、どこまでも肉、

四一七

行け、私の愛するもの、若し要せらるゝなら餘事を抛つて、この日この時、剛氣、眞實、自敬、決斷、救持にあなたを養へ、

あなたの個性を堅固に打ち建てるまで休むな。

### 臨終の人に

あなたへの使命を果すために、他の凡ての人の中からあなただけを選び上げる、

あなたは今死ぬのだ——他の人々は何んどでもいへ、私はいひ紛らすことは出来な

い。

私はあるのまゝで容赦がないのだ、然し私はあなたを愛する——あなたはもう遁れる術がない。

やさしく私は右の手をあなたの上におく——あなたはかすかにそれを感じるだらう、私はつべこべ云はない——私は自分の頭をかしげ近づける、而して半ばそれをつむ。

私は静かに坐る、——私はどこまでも忠實である。

私は看護人以上、親以上だ、隣人以上だ。

永生を持つた靈肉の上に於て、あなた自身であるものゝほかの凡てから私はあなたを自由にする、あなたは必ず通れ出るだらう、だから、

あなたがあとに残してゆく遺骸は、謂はゞ排泄物に過ぎないだらう。

思ひ設けぬところから太陽が輝き入る、

強い思ひと自信とがあなたに満ちる——あなたは微笑んでゐる、

私があるの病氣なのを忘れてゐるやうに、あなたは自分の病氣なのを忘れる、

あなたは藥劑を顧みない——あなたは歎き泣く友等を意としない——私があるの傍らにゐるからだ、

私はあなたから他の凡ての人を遠ざける——もう悲しまるべき何ものもない、

私は悲しまない——私はあなたを祝福する。

## 母と嬰兒

四二二

その母の胸に巢喰つて眠つてゐる嬰兒を私は見る、  
眠れる母とその嬰兒——氣息をひそめて、私は永く／＼二人に見入る。

## 走者

まつ平らな道路の上を熟練した走者が走る。  
彼れは瘦せがたで、筋骨が逞しく、肉づきのいゝ脚を持つ。  
彼れは輕衣に身づくりろひし——走るにあたつて前かしぎとなる。  
拳を軽く握りながら、肘を少し胸から離して。

四二三

忍耐強いしづかな蜘蛛

四二四

忍耐強いしづかな蜘蛛、

それがひとり、小さな突角にうづくまり、

身のまはりの大きな空間をはかりしらべ、

体内から絲、絲、また絲をくり出し、

絶えず延べほごし——絶えず休まずひろげてゆくのを私は見る。

而して汝、おゝわが魂よ、汝の立つところ、

無邊際の空間に取りまかれ、取りまかれながら、

絶えず考慮し、冒険し、突進し、——諸ろの世界を尋ねてそれを結びつけ、

遂に汝の欲する橋を架け——遂にしなやかな錨をおろし、

遂に汝の投げるいと細き絲で、いつこかを、おゝわが魂よ、たしかに引捕へるよ。



## 牢獄の中の歌手

四二六

「お、恥ぢ、なやみ、かなしみの身の様

お、空恐ろしいおもひ——捕はれの生魂」

牢獄の廣間づたひにこの復唱が響きわたつた、

屋根——上天の頂きにまでそれは高まつた、

そこでは嘗て聞かれなかつた物思はしげにもやさしく強いメロデーとなつて漫々とた  
だよひながら、

遠きに立つ監哨、武装せる監守にも歌は達してその歩みをとどめながら、

感激と畏れとをもて聴く人皆の血行を押へつけながら。

## 二

「お、あはれさ、暗らさ、かなしみの身の様

お、許るせよわれを、幸薄き生魂」

ある冬の日、陽は西に低く傾いてゐたその時、狭い廊下を、その國の偷盜と流賊との  
間を、

(そこには何百人となく、しほれ顔の殺人者と、悪さかしい贗造者とが、

牢獄の中の日曜の會堂に集つてゐた——その周圍には監守が大勢、十分武装して、物

物しい眼で警戒しながら)

それは凡て暗らく腐敗した腫瘍、國民の中の犯罪者の集團、

その間を、一人の「女性」が靜かに落着いて、兩手に一人づゝの無邪氣な幼な子を抱き

四二七

ながら歩んで来た。

而して講壇の上、おのれの側なる腰かけに幼な子を坐らせて、

彼女は先づ樂器もて音律的な低い前奏曲を奏し、

やがて世に類ひない聲を揚げて、

古雅な聖歌を歌ひはじめた。

三

聖歌

「牢屋の中にこめられた一つの魂が、

叫ぶ、助けよ、おゝ助けよ、而して彼女の雙手をふり動かすが、

その眼はとざされ——その胸は血ばしるも、

ゆるしは來らず、やすらひのなだめも、

おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の様、

おゝ空おそろしいおもひ、——捕はれの生魂」

ひまなく彼女の歩む歩み、

おゝ日毎の悶え、夜毎の悩み、あらず、親しましい手、あらず、友の面わ、やさしい  
心も、ゆるしの聲もなくて。

「おゝあはれさ、暗らさ、かなしさの身の様、

おゝゆるせよわれを、幸薄き生魂、

この身ではない、罪を犯したのは、

あさはかなこの肉の體が破滅の首輪、  
雄々しく長くさへはしたものと、  
肉には勝ち得ぬこの身は弱いもの。

おゝ命、命はない、かなしみが苦しい、

おゝ打敗れて、無視されて燃える魂」

(なつかしい牢獄の中の魂よ、堪へ忍べ、

暫らく——やがていつかはゆるしが近づく、

あなたを自由にし、あなたを家に歸らせるために、

神々しいゆるし手、「死」があなたに、

もう囚はれの身ではない——恥ぢもない、かなしみもない、  
去り行け、神に自由を許された一つの魂)

## 四

歌手はもだした。

おだやかに澄んだその眼が、上向きになつた凡ての顔の上にかどやいた、

不思議な牢獄の中の顔の海——さまざまに異つた顔、悪さかしい顔、殘虐な顔、刀痕  
のある顔、美しい顔、

かくて女性は立ち上り、狭い廊下を、人々の間を過ぎ去つた、

その上衣は沈黙の中にさやくと鳴つて人々に軽く觸れながら、

彼女は幼な子達と共におぼろ闇に消えて行つた。

## 五

囚人の上にも、武装した看守の上にも、彼等凡てが身動きをはじめる前に、

(囚人は牢獄を忘れ、看守は弾ごめした短銃を)沈黙と静止との不思議な瞬間が来た、深い、半ば押しつぶしたすゝり泣き、涙にまで動かされて面を伏せた悪人の聲、

若者のせはしい呼吸と共に、故屋の記憶、

子守歌を歌ふ母の聲、姉妹の心くばり、幸福な幼年時代、

長く閉ちこめられてゐた心はそれらの思ひ出にゆるぎ立つた、

——不思議な瞬間だ——けれどもその後、淋しい夜、多くの人に、そこにあつた多くの人に永年の後——臨終の際にも——悲しい復唱——その調子、その聲、その言葉が、

再び歌はれる——いつくしく落着いた「女性」は狭い廊下を歩み、

又も泣くやうなメロデーを牢獄の中の歌手は歌ふのだ、

「おゝ恥ぢ、なやみ、かなしみの身の様、

おゝ空恐ろしいおもひ、——捕はれの生魂」

ワルト・ホキットマン

私は彼れを一個のローファー (Loafer) だと呼んだことがある。然しこれは勿論私の造語ではない。一八四〇年十一月の「ロングアイランド・デモクラット」に彼れはローファーを讚美する一文を掲げてゐる。「どれ程私はローファーを愛してゐるか。あらゆる人類の中で、かの純真な、生得不變のローファーに比べ得るものを見ない」「私に汝の落着き拂つた、堅實な懶惰の子を與へよ」。世間一般のローファーに對する侮蔑を見返すために、ローファーが相集つて一國を創立する空想をも彼れは描いてゐる。成熟の晩かつた彼れが二十九の年に書いたその一文には、宗教的な匂ひさへ漂ふほど感傷的ではあるが、その背後には彼れの本質が輝いてゐる。「私がローファーと呼ぶのは何か。

ローファーといへばローファーだ。さうもいつてゐる。ローファーとは怠けものゝことだ。約束の出来ない人間、誓ふことをしない人間だ。主義と節度とを所有しない人間だ。彼れは働き甲斐のある人々から齒痒ゆがられる。彼れは自分の欲することしかない。外から強ひられることを極端に厭ふ。彼れは國家社會の建設に與らない。けれどもファナティックの外には誰れもが彼れを憎み得ないだらう。而して彼れは何事もなさなかつたか。人類の生活が始つて以來、人貌を有する他の動物としてのみ存続したか。或はさうかも知れない。さうならば自然は殊の外寛大だ。

彼れといふのはワルト・ホキットマンのことだ。

彼れは十三の時以後學校なるものゝ門をくゞらなかつた。それは彼れにはいゝことだつた。十五の時に肉體的には既に十分に成熟して一人の大人を思はせたが、その心は秘藏の寶玉のやうに容易に大氣に曝らされなかつた。彼れは唯吸收することだけを

知つてゐたやうに見える。而かもそれは初めは都會を吸收せずに元始的な自然を好んで吸收したのだ。彼れはロング・アイランドの海沿ひや田園をその唯一の伴侶として、草木の如く自然に育つた。彼れの性格の基本的の基礎はそこに大根を張つたのだ。後年彼れはいかに種々なる人間生活の諸相に當面したらう。而かもそれを表現する彼れの言葉の後ろには、大自然の中に悠遊するパンの懶惰な姿が滲み出る。結局太陽の光と離れ住むことの出来ない自然、結局自分の制約以外のものには絶えず反抗して倦むことのない自然、黙つて憎み叫んで愛する自然、それ自身以外には誰れにも本當に理解され得ない自然、それが死に至るまで彼れの基調をなしてゐた。

「今のこの時から、自由！」

今のこの時から私は制約や、空想的な境界線から自らを解放することを命ずる。

どこに行かうと、私は全然的に絶對的に私自身の主、

他人にも耳傾け、そのいふところをよく思ひめぐらし、

立寄り、探り求め、受け入れ、熟慮しはするが、

しとやかに、然し拒み難い意志を以て、私は私を捕へんとする桎梏から私自身を奪

ひかへすのだ」

さうだ。彼れは常に自分を自分自身にまで奪ひかへす男だつた。それにも拘らず、彼れは常に詩人たる自分から離れてさまよひ出ようとした。新聞記者として立身しようといふ欲望は可なり強く、又講演者として生活しようとしたこともあつた。小學校の教員となつたのは恐らく彼れの貧困がさせた業だらう。教師としての彼れは「決して失敗ではなかつたが、斷じて成功ではなかつた」。新聞記者としても、講演者としても、要せられたる思慮の慧敏と才智とを所有してゐなかつた。彼れの心の水の比重は極めて重い。そこに投ぜられた事象は長い時間を経なければその底には達し得なかつた。

彼れはまた政客たらんと企てたこともあつた。タムマニー・ホールの爲めに畫策して、ブルックリンに於ける政争の或る重要な役目を演じようとしたこともあつた。けれどもそれらの凡ての目論見は幸ひにして彼れの傾向とそりを合はさなかつた。唯かゝる彼れの徒弟生活に於て、彼れに著しく役立つたものは都會の生活にもぐり込んだことだつた。

近代の都會、それはエヂプトに金字塔があり、希臘にアテネの殿堂があるやうなものではないか。私達の文明が他の文明によつて置きかへられる時代は遠からざる未來に来るだらう。私達の文明が一つの廢墟になつた時、奇異な傳説となつて残るものは近代的都會の追憶ではなからうか。そこに行はれた施設と生活、その生活の歡びと悲しみ、及びそれが反映する特殊な餘光は、誰れかによつて完全に嚙下せらるべきだつた。果して都會の歌手は數多く輩出した。けれども、昔の宮廷の詩人が田園を見て歌

つたと同様の空想で、都會を歌ふのを恥ぢた人が幾人あつたらうか。或るものはその美のみを讚美したかも知れない。或るものはその醜ばかりを呪咀したかも知れない。然しながら都會をその全體に於て掌握したものゝ數は決して多いといふことが出来ないだらう。ホキットマンは少くも、古い意味の都會から私達の都會に移住することの出来た一人だつた。彼れは自然に投入すると同じ熱意と度胸とを以て都會の生活にまぎれ込んだ。渡船の上、乗合馬車の中、教會、社交俱樂部、劇場、オペラ・ハウス、酒場、孤兒院、監獄、法廷、公衆浴場、博覽會、講演、音樂、……都會的大火事……「どこであれ、人間の生活が絶大な塊りになつて動きつゝあるところには、必ず彼れがゐてそれを感じ且つ吸収してゐた」。彼れは都會に於ても *divine average* (神々しい平民) がいかに彼等自身をその特殊な生活に適合させてゐるかを見たのだ。

彼れが田園にあつて活きたのは十七から二十二まで、ニュー・ヨークとブルツクリンとにゐて都會に接したのが二十二から二十九まで。

彼れは或る時はフロッコートを着、トップ・ハットを被り、胸に花をつけて細身の杖を携へることを忘れなかつた。然しそれは、彼れが直ちに自分で發見した如く、彼れには不似合ひだつた。彼れが心を許して接し得るのは *Powerful uneducated Persons* だつた。渡船の水夫の誰れ彼れ、乗合馬車の御者の誰れ彼れ、その名は死前の彼れの記憶にも膠着して離れなかつた。

遺存してゐる文書によれば、彼れは十九の年頃より詩を發表し始めたやうに見える。彼れのそれらの詩中に現はれる姿は感傷的で悵鬱だつた。それは凡ての青年にあり勝ちのものだらう。生に對する何とはなき不安、死に對する靡ろげな憧れ、やりどころなき愛の悶え。

「凡ては五ひの苦を持つてゐる、老年は死をおそれる、



青春のなやみは誇りと欲念、  
而して心の痛み、その胸の中には、  
熱高き情炎」

さういつた傾きのものだ。死も亦彼れの詩題にふさはしかつた。西行法師と同様に彼  
れは死を人なき自然の一隅に選んだ。

「誇りがにも華やかなる堂にありて、

悲しみの涙、友の歎きにかこまれつゝ、

われは、終りの時せまりて、

このうつろ身をかいはるを恥づ。

.....

日の目まさに閉ぢなん頃

こひ願はくばわが死の床

擔ひ出だせよ空の清きところ

草香ひ茂り木むら嚴かに震ふそこ。

休らひのしどま心をやはらげ

見上ぐるにいや高き木末は

草生の土によき影をなげ

涼しくあらんそこにわれは。

.....

われは人の近きにあるを願はず、

されど日の光の沈みゆくかはたれ

このうつし世に別れを告げて、かならず

よみちにいなん——たゞひとりわれ」

かゝる詩は彼れの心の聲ではない。凡ての青年がその捕へ得ざる幻影の上に築き上げる蜃氣樓だ。

而して彼れは二十九の年まで恐らく戀を知る機會を持たなかつた。戀といふ煉金術は彼れを更らに早く詩人にしてゐたかも知れなかつた。あの雄々しい強健な體軀と、徐ろにはあるけれども心の奥底にまで感じこむ熱情とは、彼れを一人の戀人にさすには十分であつたらう。唯彼れは貧しかつた。父業の建築請負ひで生計を立てゝゐた。而して自分自身を見出さなかつた彼れは、人に對して不必要に臆病だつたやうに見える。

「幸薄きわが愛欲はまだ見ぬ人にこがれ寄る」と悲しく歌ひながら、まだ見ぬ人を見

窮めようとはしなかつた。同時に愛欲の鎖はローファーなる彼れには重過ぎたかも知れない。戀愛はやがて生涯を繫縛して解放しない家庭生活を豫想する。この豫想は彼れにとつては由々しい警戒であつたらう。それ故に彼れは不思議な空隙を胸に感じつゝ、美しい夢を冥想の中に描くのを選んだかも知れない。彼れはその代り同性の交誼に對する熱烈な實行者であり讚美者であつた。「カラマス」篇一篇は實にこの男らしい熱情の衝搏の記念碑である。「Camerado」と彼れは同性の友に呼びかけた。あの言葉の意味と響きとは特異だ。あの一語の中に新しい友情の定義が藏されてゐる。これに反して彼れの戀愛歌のいかに非人格的であるよ。彼れはその「アダムの子等」に於て戀愛の赤裸々なる當體を披瀝した。ニュー・ヨークの生活に於て、彼れは公娼制度が如何なる慘害を人間の生活に及ぼすかを見て、賣娼制度取締りのために叫んだ。かゝる事實が或は彼れをして性欲詩を敢てせしめた動機になつたのではないだらうか。彼れ

は健全なる性交のみが人類の未來に正しい約束をなすものであり、従つてそれを高調するのは當然であるのみならず當爲でなければならぬと感じたらう。然しその詩篇にすら、二三のものを除く外には、極めて抽象的な表現を求め得るに過ぎない。

生れてから二十九年の清潔な徒弟生活、それは彼れのやうな境地にあるものに取つては、寧ろ珍しい生活であつたといつていゝ。彼れは三十にして頭髮が既に白くなつたけれども、その心臓は小皺一つなく張り切つてゐた。而して南方ニュー・オルレアンス市からの招致を受けてクレッセント紙の記者となる爲めに一人の弟を伴つて南に下つた。

彼れは元來奴隸廢止運動の熱情家だつた。彼れの詩 "Blood-Money" はこの熱情を紙面にたゞきつけてある。南方は奴隸制度擁護の本陣だ。そこで彼れが如何なる程度に自分の主張を徹底したかそれは知られてゐない。然し恐らく彼れを最も牽きつけた

ものは、その溫暖な氣候と南歐の血を多量に交へた人々の生活とだつたらう。彼れの太陽、少年時代ロング・アイランドの空に仰いで、その胸の中に深く吸ひこんだ太陽の光が、内外から彼れを擦りはじめたのだ。恥づかしげに眉をしかめて、手持無沙汰らしくあたりを見まはす彼れの可憐な姿が私の眼には映る。彼れは三月に行つた。而して突然五月にそこを去り、中部諸州を旅行して北部に歸つた。彼れは固より借金を綺麗にするための出稼ぎにそこに行つただけけれども、その退去のあまりに速急だつたのには謂れがなければならぬ。

恐らくこゝで彼れは始めて戀を知つたのだ。彼れの晩年のカムデンの生活に於て、屢トラウベルにその時代の生活の告白をなす約束をしたにもかゝはらず、遂にそれを果さなかつた。或る傳記者のいふところによれば、その躊躇は彼れ自身の爲めではなく、對者に個人的の累を及ぼさんことを恐れたものらしい。それ故彼れの情人は既婚の

婦人だつたらうと想像されてゐる。彼れはたゞ探りよることの出来ない暗示として次ぎの言葉をサイモンズに告げてゐる。

「若き壯年時代、中年時代、南方に住んでゐた頃の私の生活は、おもしろおかしく肉体的なものであつて、疑ひもなく世の批難を受くべきものだつた。結婚はしなかつたが、六人の子を擧げた。——二人は死んだ——南部に生活してゐる一人の孫は、時折私に手紙をよこす——或る事情（それは彼等の財産と利益とに關係してゐる）の爲めに、二人は親しい間柄であることが出来ないでゐる」

けれども彼れの詩集の全部を通じて、父親としての彼れの喜びと歎きとは全く窺ふことが出来ない。彼れはそれ程自分を晦ますことの出来る詩人だつたらうか。それ故に又或る傳記者は、六人の子を擧げたといふ彼れの告白を不思議な詩人のハルシネーションの一つに考へようともしてゐる。

三ヶ月にして突然そこを去つた彼れには、痛ましい事情が潜在してゐたのではなかつたか。「揺り動きやまぬ搖籃から」を読むものは、そこに迸り出た激越な感傷の裏に或る手蔓を見出し得ないであらうか。

詩人が戀の味を知るのは虎の子が血の味を知つたに等しい。彼れが再びニュー・ヨークに歸つて新聞記者と建築請負との業務に従事するに至つた後、その本然の氣稟ははじめて萌え出ではじめた。彼れの表現は在來の舊套を脱してはじめて彼れ自身のものとなつて來た。三十四歳の時、彼れはその手帳の中にかう書いてゐる。

「その大望といふのは、文學的な若くは詩的な形式によつて、妥協することなく、私自身の肉體的、感情的、道德的、理智的並びに詩的な個性を忠實に言葉に表現しようといふことだ——この年代、この土地にあつて、特殊な個性を、今までの如何なる詩人よりも、如何なる書物よりも、更らに確實で普遍的な意味に於て探究しようとい

この言葉は一つの立派な宣言である。彼れはその中に近代人たる彼自身を的確に擱んでゐる。彼れは永遠の爲めに書かうとはしなかつた。彼れは永遠を書かうとはしなかつた。彼れは第十九世紀の亞米利加に生れ、彼れにのみ許されたる生活環境にある彼れ自身を赤裸々に表現することを唯一の心がけとした。彼れは時代と場所との如何なる接會點にもしつくりあてはまり得る彼れを創立しようとするよりも、定められたる環境にあつて、思ふ存分に育ち上り、その育ち上つた自分を誰れもが表現し得ないやうに的確に、特殊に、諷偽りなく表現しようとして決心したのだ。而してその決心の關する範圍に於て遺憾なく成就したのだ。それ故に彼れはコスモポリタンであると同時に地方的であり、超越的であると同時に僻見的であり、人であると同時に擬ふ方なき一個のホキットマンだ。彼れは遂に理想主義の幽靈たることから彼れ自身を救つた。概

念の奴隸たることから彼れ自身を解放した。人々は恐らくこの詩人の地方的であり僻見的であり餘りにホキットマンであるのに疑くかも知れない。然し私は彼れのこの明らかな標示にその詩の特徴を見る。それは無限の大意を背景とした一つの星座の莊嚴と微妙とを聯想させる。彼れの傍らにあつては、バイロンもシェレーも、ブレイクさへもが影薄き理想の燐光に過ぎない。

一八五五年彼れの三十六歳は彼れに取つても文學そのものに取つても忘れ得べからぬ年であつた。不思議な、これといつて何を仕でかしたともない、家族のものにも依體のわからなかつた、大男のローファーはこの年に十二の詩を收めた九十四頁の小詩集を世に提供した。「草の葉」(Leaves of Grass) がそれである。ポーマノックの汀沿ひに、ブルックリンの喧騒の中に、南方及び西方諸州の放浪の旅の中に、彼れが蓄へ來たつた一見無統一な平凡な生活及びそれに対する特殊な整頓法と省察、その詮じつま

つたものがこの詩集だつた。彼れはその當時亞米利加人に、彼等の用ひなれた言葉と、彼等に本質的なリズムと、彼等を裏書きする感情とを以て話しかけたのであつたけれども、それは恐らく彼等にとつて餘りに近過ぎたのであらう。彼等にはそれが彼等の詩であることが判らなかつた。彼等はやはり、前時代の言葉が彼等の詩だと思ひこんでゐたらしく見える。詩集は讀者を得なかつたのみならず、侮蔑を以て報ひられた。

然し彼れはそれを恐れなかつたやうに見える。何故なら彼れは彼れの見出した道が唯一の道であることを明らかに感知してゐたから。而して彼れは神經衰弱者のやうに噪急ではなかつたから。彼れはもう堂々と歩く。彼れは凡ての人に好意を持つ。彼れは何物にも拘束されないローファアの自由を以て、彼れの時代の信仰の開基であることを知り抜いてゐた。七十に垂んとして彼れの書いた回想は、實にその當時の彼れの心だ

つたらう。

「私は溫和な推賞の言葉も、大きな金錢上の報酬も、或は現存の流派や習俗の承認をも期待してはゐなかつた。成就か半成か知らないが、私の仕事の全體に對する慰藉となるものは、私の衷にある魂以外の影響に少しも累はされることなく、私らしく私の云はんとすることを云ひ盡し、而してそれを見當ちがひをせず書き記した點にある。——その價值如何は時が定めるだらう」

「詩としての『草の葉』の背景に私は習俗的な主題の凡てを拒んだ。持ち合せの修飾はしなかつた。戀と戦との取つときの構想、舊世界の詩に現はれる稀代の人物、そんなものはない。云ひ得べくんば、單に美化のためにしたといふやうなものも更らない——傳説、神話、ロマンス、麗句、韻律、そんなものはない。然しながら新たに成熟しつゝある十九世紀の人類生活の普遍的なそれ、而して殊に、現在の合

衆國に於ける多數の事例と業績との凡て

これであつたのだ。彼れはかゝる主題が他國人によつて無視せられ、他の時代によつて棄却せられるのを顧る暇がなかつた。そこに云ひ得べくんば彼れの弱點はある。然しそこに云ひ得べくんば彼れの力はある。彼れは明らかに一つの時代と一個の人間とを時間と空間との交叉點に浮彫りにしたのだ。

仕事場を持つた彼れは本當の生活らしい生活にはいつて行つた。生活に實驗的といふことがあつてはならぬ。そこからは本當は何ものも生れては來ない。然しながら從來の彼れの生活は、結果に於て、實驗的といふことが出來ないとするなら少くとも經驗的であつた。彼れの意識の中には、何ものにか役立たせるために生活を導くといふやうなところが無いではなかつたらう。大きな意味の徒弟生活は彼れの何所かに膠着してゐたやうに見える。然しながら彼れは今生活そのものには入り込んだ。生活には

入り込むこと、それは如何に難事であるよ。凡ての技術に於て玄人となるのはまだ達し易い。然しながら生活に於て玄人となるのは生死を賭しての冒險である。動ともずるとミイラ採りがミイラになるべき危険な境地だ。そこには十分の智慧と決意と果斷とが要望される。多くの人はそこには入り込むと同時に自分自身を見失つてしまふ。況んや生活の玄人となつて而かも清淨な素人の美點を失はぬこと、それは妻となつて處女性を死ぬまで失はぬ女性の稀れなるが如く稀れだ。彼れは然しかゝる離れ業の名人だつた。彼れは結局本質的なローファーだつたのだ。四十二の時、彼れはかう書きつけて自分に云ひ聞かせた。

「この日、この時、私は純潔で、完全で、おだやかな血液を持つた雄々しい肉體の所有者であるべく決心した。水と純粹の牛乳の外は凡ての飲料を避け、凡ての油氣の多い肉や晩い夜食を禁ずることによつて、淨化され、聖別され、精神化され、力

づけられた肉體を……四月十六日」

肉體からはじめてその陣容をととのへた彼れはやはり彼れらしいと私は思ふ。それによつて私は彼れの心臓の武者ぶるひを感じる事が出来る。

彼れの生涯が人知れずかゝる曲折を描いて廻旋する間に、その祖國は彼れに無上の舞臺を提供した。米國は世界の環視の中に一つの飛躍をなすべく餘儀なくされたのだ。如何なる經濟的事情がその背後にあつたにせよ、彼女は人類的正義を意識して解剖刀を自分の横腹の腫物に擬せねばならなくなつた。リンカーンはその主治醫として選ばれた。北方の人道主義者達が叫んでやまなかつた奴隸廢止の實行が戦争の形に於て結果されたのだ。米國は最後の結合をなすために先づ分離しなければならなかつた。彼れは戦争に参加した弟の負傷を聞いて、萬事を放擲して南方に向つたが、一度戦争の悲惨を見るや更らに萬事を放擲して傷病者の看護に従事した。彼れはそこに母

であり、兄であり、友であつた。そのゆるやかな粗野な親切は暗らい病院の寢臺の列の上に日光の如く暖かつた。彼れも亦暖められた。彼れの看護生活は二十ヶ月の長きに亙り、六百度病院を訪れ、八萬から十萬の間に達する傷病兵に接したのだ。而してさすがに健全無比だつたその肉體も打撃を受けて一部分の不隨を起すに至つた。

ワシントンに於て彼れはオ・コンナー、ポロース其他の知己を得てゐたため、内務省附きの書記に採用されて、兎に角定収入を得ることが出来た。それは彼れに取つて一つの安全な繫船だつた。役所のストーブと燈火とを利用して夜晩くまで讀書し得る楽しさを、如何に自慢らしく彼れはその母に書き送つたか。オ・コンナー夫婦も彼れにとつてはよきサマリヤ人であつて、彼れはその家に寄寓して楽しい朝夕を過ごすことが出来た。彼れがピーター・ドイルと知つたのもこの頃のことであらう。或る日ポロースを訪れた歸りの電車は夜になつて雨だつた。彼れは客といつては自分一人だ



けの電車の中で、車掌をしてゐたこの男と近付きになつたのだ。ドイルは南軍の兵士で負傷して捕虜になつたアイルランド人だつた。ドイルは無學で詩などは勿論解らない男だつたらしい。けれどもその暖かい質朴な心臓は直ちに彼れを引きつけてしまつたらしい。彼れは死にまでドイルをベイト／＼といつていつくしんだ。

この上なく平和な彼れは「草の葉」の著者であるために内務省から罷免された。オ・コンナーがその事實に憤激して彼れのために辯護の評傳を書いた。彼れに對するまざまつた辯護の聲は恐らくこれを以て嚆矢とするだらう。彼れはまた友人の世話で大藏省に職を得た。得なければならなかつた程彼れの詩集は賣れなかつたのだ。

彼れの四十七の時彼れの親愛の的なるリンカーンは戦亂の凡ての血を負ふて犠羊の如く屠られた。而してその屍の上に新らしい米國の生活は建設せられはじめた。彼れはそれらの凡ての印象を「鼓聲」(Drum-taps)と「自選日記」(Specimen-days in America)

とに傾注した。果して奴隷廢止が戦争によつて遂げられるかを彼れは迷つたことがあつたが、而して南軍の威勢は一時彼れを迷はせるに十分であつたが、遂に北軍の勝利が達成せられるに及んで、彼れは流血の償ひが辛うじて遂げられたのを感じずにはゐられなかつた。彼れは確かに或る昂奮にあつた。彼れは聲を大にして世界の歡びの爲めに叫んだ。

然しながら彼れのかゝる昂奮の蔭には、彼れ一身に取つての悲劇が人知れず演ぜられてゐたのだ。オ・コンナー夫人の回想記によれば、彼れが四十五の年(即ち一部の不隨性に襲はれた年)、彼れは一人の女性を知つた。而してその女性が彼れに與へた友情的な手紙が、不圖その良人の手に落ちた。良人は憤怒と嫉妬から衆人稠座の中でホキットマンを詰責した。その女性に對して愛敬を感じてゐたホキットマンは、この事實があつて後深く彼女に同情した。彼れはこの事件をオ・コンナー夫人に告げて「若

し彼女が妻でなかつたならば立ちに彼女と結婚するだらう」といつた位だつた。「アダムの子等」の中にある「群衆——その海原のさかまく波間から」(第一卷参照)なる詩はこの女性にあて、彼女の歌つたものと考へられてゐる。

彼れはこの「白哲で蔭色の眼と髪の毛とを持ち、やさしく柔和な、いかにも女らしい小肥りな女性」に對して、長い間心の中に深い苦悶を味つたやうに見える。その爲めに彼れは己れの愛着的な性情を咀ひさへもした。この苦惱は多分彼れの四十九の頃まで持ち續けたらしい。その頃の手記、

「謹つばちな子供じみた自己偽瞞、實際對者には存在せず、自分にばかり存在してゐたものを空想し、悉く自己に溺れて偽瞞を重ねたこと、而してその私の弱點——私の最大の弱點、所缺點を注意せよ。けれども常に16(こゝにはP字が記されてそれが抹殺されてこの數字に取り代へられてゐる)に對しては親しみの氣持ちと態度とを

持て。然しもう彼女を追ふな」

「冷靜な、溫和な、(感情を表はすよりは)變りのない態度——貧しい人に與へよ——誰れにでも合力せよ——犯罪者と愚かなものと卑しい人々全體に對して寛大であれ——然し少しく語れ——言ひ譯けをするな——祕密を漏らすな——洒落をいつたり、言葉に綾をかけたたりするな。或は諷刺的な挿話をするな。(普通の場合には)論争せず、理屈をいふな」

「七月十七日

何んとしてもかんとしても私自身(と私の動靜)をこの不斷の絶大な(而して絶大な)動亂から引き放すのは大切なことだ」

「今、この時からもう動搖しまし、(或は)「一字缺」しまし。今後は決して(如何なる事情があらうとも決して)彼女を見まい、彼女に會ふまい、彼女に話したり云ひ聞きなかりをしまし——生きる限り、今から、いかなる會見もしまし。」

七〇年七月十五日」

「彼れの感情その他は、彼れの愛欲、友情などが酬ひられようとも、酬ひられまいとも、それに關係なく彼れの中に完い。

自然に於ける完全な樹や花のやうに、彼れは生長し彼れは花咲く。——それが讚嘆の眼で眺められようと、全く人知れぬ荒野や森林の中にあらうとも。

彼れの同體である大地はそれ自身の中に完全で、隠れたる目的に對して生命と力と

を溢發する生長の凡ての過程を包有してゐる」

「愛着的な性情を押へつけろ」

「それは多すぎる——命をさいなむばかりだ」

「この病的な、熱烈な、均り合ひのとれぬ愛着性といふ奴め」

私はこれらの言葉に附加する必要を見ない。

唯忠實な彼れの研究者なるエモリー・ホロウエー (Emory Holloway) のホキットマンの戀愛關係に對する意見を附加しておく。

「『これらから私の考へるところによれば、ホキットマンは夫婦關係を結ぶのは彼れに幸するものだとは考へ得なかつた程、彼れの自由を愛してゐた。若し彼れが苟も結婚してゐたら彼れに取つての大きな誤謬であつたらう。彼れは屢私に云つて聞かせた、彼れは妻を持つ人々を羨みはしないが、その子供達のあるのを羨むと云々』(オ・

## コンナー夫人の言葉

このホキットマンの信據するに足る戀愛の事實から讀者は次ぎのことを注意するに難くあるまい。それは彼れがその情人として既婚の女性を選んでゐるといふことだ。かゝる婦人又はかゝる婦人の幾人かによつて彼が子供を擧げたとするなら、彼れがサイモンズになした告白の謎のやうな言葉が明瞭になつて來る。それはかういふことだ。この悲劇的な三角關係の當事者達は、事件にかゝはりのない子供の法律上、社會上、及び財産上の利益の爲めに、彼等自身の個人的感情を犠牲にして、事件を秘密に葬ることに一致したらうといふことだ」

彼れの女性に對する態度がこのやうであつたとすると、それは從來の結婚制度、家族制度に對する由々しい威脅だといはなければならぬ。さりながらそれは從來支持された制度に對する威脅であるが故に惡であり得ねばならぬか。これは問題である。そ

の解決の將來に残さるべき重い問題である。男と女と子供とが結婚といふ重荷から解放される時のやがて到來するのを私は豫感せずにはゐられない。而して私としては要求せずにはゐられない。この要求には何かの機會に於て更らにいひ及ぶことがあるだらうと思ふ。

ホキットマンが潜らねばならなかつた内外の大きな事件殊にその悲戀は、彼れにとつての優れた多數の詩の母胎をなした。一八六四より一八七〇前後の諸作を讀むものは、その中に醸された豊醇な詩味に打たれずにはゐられまい。彼れの價値は段々認められ始めて國內にも英國にも多くの才能ある契合者を見出すに至つたけれども、彼れは底深い孤獨の寂寥の中にあつたのだ。

五十四歳の時正月に局部的な中風症を發し遺書を作製したといはれてゐる。この永久に若い詩人にもあの物淋しい晩夏の風がしめやかに吹きはじめたのだ。彼れは自分

の職務を捨て、ワシントンの陶友達と袂を別つて北方の海岸に轉地すべく旅程にのぼつたが、フィラデルフィヤで病が急に重つたので、そのまゝ弟の住んでゐるカムデンに行つてその家に身をおいた。その當時のカムデンは無力なものや、嫌はれものや、隠棲者が隠れにゆくやうな小さな町だつた。

貧と病と老境とが彼れに迫つた。然し大きな彼れの心は靜かに雄々しくそれ等を受け取つて震へなかつた。以前から彼れの詩を読んで天啓の如く傾倒してゐたアン・ギルクリスト女史は、彼れの淋しい孤獨の生活を知つて英國から移住して來て結婚したいと申出たけれども彼れはそれをも靜かに拒んだ。彼れはその唯一の所有なる自由を固く擁護したのだ。彼れの自由は年を経るに従つて益光輝を増した。それは段々神々しい自然さを附加して來た。彼れはその同體なる大地の方へと近附いて行つた。而してそこから、一層深いところからその力は湧きはじめた。清澄な、大きな、凡てのもの

を暖かくじつと包みこむやうな力が彼れに光暈を加へた。「コロンバスの祈禱」「宇宙的」といふやうな詩は五十五の時の所産だ。心から彼れを慰めるものも亦彼れの周圍に集つた。ギルクリスト女史は遂にフィラデルフィヤに居を構へて、彼れの時々訪問に氣持ちのよい團樂を提供し、テインパー・クリークなるスタッフォード家も亦彼れの爲めに門の戸を喜んで開いた。而して、それらにも増して彼れを惹きつけたものはその幼なじみの自然だつた。トラウベルとの談話に於て、彼れは絶えず自然からの交渉を綿密に告白してゐる。

彼れが六十三の時、彼れの詩の最初の承認者であり、同時に兄の如き友であつたエマソンが死んだ。

「美しい男、自分自身の上に立脚し、凡てを愛し、凡てを抱擁し、而して太陽の如く健かで朗らかだ」

と彼れはその友を回想してゐるが、それはそのまま、彼れの肖像畫であらねばならぬ。

六十五の時、この稀大のローファーも自分の巢をミックル街に構へた。而して一八七三年、彼れが七十三の三月廿六日、微雨の午後に靜かな死を死んだ。

私はこの短かい彼れの小傳を書きながら考へてゐる。私の眼の前には、ゆるんだ輪廓の、微笑を絶たない、放牧時代の父長じみた大きな一人の男がアキンボをして見下ろしてゐる。私は彼れに見下ろされることによつて何んの怖れも感じない。却て或る心強さを感じる。彼れは十九世紀に生きてゐた亞米利加人だ。然しながら二十世紀の日本の私の机の前に立つのを見ても彼れは全然不都合ではない。悠久な人類の生活の間に一人の彼れが現はれたといふのはいい。全然彼れの現はれ出ないのを考へるのはやはり私を淋しくさせる。私は彼れが「草の葉」の第一版を世に問ふた頃と覺はしい肖像畫が好きだ。軟かい縁廣の帽子をやゝ斜めにかしげて、その庇の蔭にその眼は少し細められ

てゐる——それは彼れの眼に觸れるものゝ角々しさを削り取らうとするやうに。その眼は大きくはない。然し美しい曲線を以て、小さな澄んだ池があるやうに皮膚によつて圍まれてゐる。その鼻の線は豊かで力強い。偏固さをすら語つてゐないではない。口は短い鬚と楔形の髯とで圍まれてゐる。この口こそは彼れを異教徒にするものに相違ない。それはさして大きくはないが見れば見る程肉感的だ。一味の淫らささへ持つてゐる。これが彼れの顔を卑俗にすると同時に抵抗し難く親しみ易くする。その喉は堅固で形よい。それが男らしい肉付きの肩にすはりよく乗つてゐる。雪白のシャツの胸をはたげて軽くアキンボをして立つてゐる。(さうだ、彼れだ、今筆執りつゝある私の前に立つてゐるのは)。何といつてもそれは無類に見事な一つの男の典型だ。いつでも靜かに、いつでも深く、見えをしないで、凡てを受け入れながら嘗て自分を失はず、一歩一歩大地を踏みしめて、この大男は自然に老いながら大道を遙か遠く旅してゆく。

完きを一人の人に期するところから錯誤は生ずる。彼れの弱点を見出すことは極めて容易なことだ。何故なら彼れ位自分の弱点について無頓着な男はなかつたから。彼れの詩が缺點に満ちてゐるといつたところが、恐らく彼れは喜んでうなづくだらう。然し彼れがなし遂げた出發點をつくるにあたつて、彼れ以下の缺點ですまし得る人が何人あるかを考へて見ようではないか。彼れは凡ての詩人がしたやうに、極めて單純なバラードの形式に於て作詩し始めた。それから彼れは怯づくとスタンザを用ゆる長詩へと乗り出した。然しその韻律はトライメーター及びテトラメーターのアイアンピック形式を出でなかつた。然し彼れは更らに進んだ。韻律を全く捨てはしなかつたけれども無韻詩の方へと進んで行つた。彼れはそれらの仕事に於て漸次自由な力を振ふに至つた。その時代の彼れの詩の或るもの、如きは、ピクトリヤ詩宗の誰れに比してもさして遜色のないものといふことが出来るだらう。けれども彼れは更らに一歩進み

出た。而して彼れに特有な主題を自家案出の不規則な形に於て表現しようと思つた。それは然し失敗に近い結果を招かねばやまなかつた。彼れの内部の生活が明らかに彼れ自身を生み出してはゐなかつたから。そこに彼れの詩の混亂時代があつた。その詩は寒く形式に整つて内容に亂れたり、内容に熟して形式に敗れたりした。而かも彼れは徐ろに然し絶間なくそれを鍊へに鍊へた。在來の表現の凡ての形式から退かねばならぬことを餘儀なくされた。何故なら彼れの不斷の鍛鍊によつて、彼れの特異な個性が全く特異な表現を必要にするに至つたから。彼れの態度は定まつた。その態度に特有のリズムが生じて來た。彼れの感情を存分にいひ現はすべき行の長さが生じて來た。それは大地から草木が生ずるやうに自然に彼れの個性から生じて來た。かくて新たなる世界は新たなる一つの詩を持つに至つたのだ。而してかゝる表現を餘儀なくした彼れの個性が暗らい生活の醸造槽の中で、如何に調合せられ如何に醱酵したかを思

ふがいに。

彼れの弱所と缺點とを指摘するのは可能でまた當然せらるべきことだ。然しながらその詩形が詩人の好奇心から生れ出たといふ人があるなら、その人は人間の生活に潜んで働いてゐるリズムを感知し得ない無能力者だといふ外はあるまい。

彼れはローファーであつた。彼れの律法は彼れの中にあつた。環境からは彼れの生活に以て切り取つたそのものゝ外に彼れの頼むものはなかつた。従つて彼れは外界の規約と制度とに對して價値を否定しないとしても、極微な價値より許さなかつた。定理定説は彼れに取つては死物に等しかつた。幼児の如き素朴さを以て、彼れは憚らず自分の要求を公言する。世慣れた人々の耳にはその聲は餘り時と所とを辨へない叫喚の如く聞こえたらう。然しその聲の中に震動しつゝある感情の力は、遂には頑なな心をも動かすと私は思つてゐる。彼れは生れたまゝに育つ、育つたまゝに老い、老いたま

まに死んだ。

彼れはいつでも現在に生きた。餘りに現在に生きた。現在の凡てを易々と受け入れた。それ故に人は彼れの生涯を以て堆積はあつても成長のない生涯だつたといふ。或はさうかも知れない。彼れは徹底的に現在に始終したが故に、それを批判すべき準拠を持たなかつたやうに見える。時代の不満に注意してゐないではなかつた。然し彼れは主義の人があるやうに、それに對して執拗な執着の態度に出でなかつたが故に、時代の不合理の一つをだに實際に提唱し矯正するところが無かつたともいへる。

けれどもそれを成就し得る人は自ら別に存するだらう。彼れはもつと素朴な信賴的な態度を以て人間に向つたやうに見える。唯彼れは凡てのローファーがさうであるやうに、自分自身をば決して曖昧なところに置くことはしなかつた。然りく否々は常に彼れの自然の發露だつた。自分の享有せんとする自由を必ず他に許すことを忘れな



かつた。

彼れはかくて先行者を有せず、従つて追隨者を退けた。彼れの追隨者たらんとするものは、その瞬間に彼れを見失つたであらう。彼れは自由の中に住む人間の可能性がどこまで行き得るかを彼れ自身に於て表現したのだ。

然しもう私は彼れを離れて行かう。彼れの時代には彼れがなければならなかつた。而して今の時代には、それにふさはしい詩人が要求されてゐる。人は常に生きつゝ常に死につゝあらねばならぬ。而して常に死につゝ常に生きつゝあらねばならぬ。

彼れをして彼れの道を行かしめよ。それを妨げるな。私達は私達の道を行かう。彼れをしてそれを妨げしめるな。

この一文の讀者は私の著作集第四輯の「叛逆者」と聚英閣發行の「新社會への諸

思想」とを併讀されんことを希望する。この二文に掲げた以外を私は成るべくこの一文の中に取り入れたつもりだから。而してこの文と他の文との間に事實の相違を發見されたら、この文に於て他のものにある誤謬が訂正されてゐると考へていただきたい。……筆者

大正十二年二月五日印刷  
大正十二年二月十三日發行

〔定價貳圓〕

譯者 有島武郎

發行者 足助素一  
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

發行所 叢文閣  
東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

振替東京四二八八九番  
電話番町四八一二番

東京市神田區宮本町五番地

印刷所 中野正社  
印刷人 高橋治一



有島武郎譯

ホヰットマン詩集 第一輯 (九版)

501  
211

終